

Śaiva Siddhānta 派のシャクティ思想¹⁾

徳 永 宗 雄

Śaiva Siddhānta 派（以下 ŚS と略）は南インドを代表する哲学派の一つであるが、この派の思想の成立事情については、まだ未解明の問題が多く残されている。これらの問題は、今後ナーヤナールの宗教詩と中世アーガマ文献の研究が進展する中で次第に解明されていくものと思われる。本稿ではそこで、ŚS の Vedānta 的思想の基本的特徴に注目し、それを、同じく南インド・タミル文化圏で成立したヴィシュヌ派の Viśiṣṭādvaita 学派（以下 VA と略）の特徴と比較検討してみたい。

VA と、それよりおよそ一世紀遅れて成立した ŚS は、3 種の padārtha (brahman, 個我, 物質存在) に関して類似した思想を持っている。即ち、両派とも一方で一元論を肯定しながら、他方で南インド特有の現実主義的精神風土に立脚して幻影説を批判し、個我とマヤーの産物より成る多元世界の实在性を主張している²⁾。また、最高存在と個我・物質存在は不離の関係にあると述べ³⁾、それを精神と身体の関係に例える点でも共通している⁴⁾。加えて、ŚS には Rāmānuja の学説に対する名指しの批判が見られない。それ故、両派の見解を明確に区別することは難しく、一見したところ ŚS は VA のエピゴーネンであるかのような印象さえ受ける。両派のこのような類似性については別のところで論じたので⁵⁾、今回は、比較的分りにくい両派の思想の相違点について考えてみたい。

VA と ŚS は、最高存在 (Brahman/Para-śiva) と個我 (cit/jīva)・物質存在 (acit/māyā)⁶⁾ が別異であると同時に一体である点で共通している⁷⁾。また、前述の通り、両者の関係を精神と身体を例えに不離の関係として説明する点でも一致している。しかしながら、その関係をどのような用語で表現するかという点になると、双方の態度にはかなりの相違が見られる。VA が advaita や bhedābheda のような曖昧な表現を極力退け、同派独自の存在論に基いて厳密に定義された prakāraprakāribhāva 等の用語を用いるのに対して、ŚS は意味の明析さに欠ける advaita という語を用いるだけでなく (B. hetu *ad* sūtra 2. 1; udāharaṇa 1 *ad* sūtra 12. 4)、その関係を abheda でもあれば bhedābheda でもあると述べ (S 1. 27)、存在論的観点から見て曖昧な態度に終始している。このような訳

で、ŚS が三者の関係を一体ないしは不離の関係と述べる時、それが何を意味しているのかも一つははっきりとしない。この派の Vedānta 的立場を明確にするには、この点を先ず明らかにする必要がある。ŚS と VA の思想の基本的立場の違いも、その上で明らかになってくるものと思われる。

ŚS によれば最高存在である Para-śiva は存在論的に個我と異なっており、それ故、解脱に達しても個我がシヴァに帰入して消滅することはない。解脱は個我が「主の御足に達して〔彼の〕召使いになる」(B. udāharaṇa 3 *ad* sūtra 11.2) ことを意味する (also S 8.12. Cf. 11.9)。また、ŚS はアーガマ神学にならってシヴァを世界生成の動力因 (nimittakāraṇa)、マーヤーを世界の質料因 (upādānakāraṇa) と見なし、両者を明確に区別する (S 1.18)。加えて、シヴァはマーヤーに直接干渉することはない (S 5.6)。そのため、シヴァがマーヤーに働きかけるためには両者の接触を可能にする仲介者が必要となってくる。アーガマ神学とそれにならう ŚS において、そのような仲介者の機能がシャクティには課せられている。

以下、仲介者としてのシャクティの性格を ŚS の資料に基いて、シヴァ、マーヤー、個我のそれぞれに関して個別に検討してみる。先ずシヴァとシャクティとの関係であるが、シャクティは「樹とその髓が二者一体であるのと同じように、シヴァと一体」(S 1.67) と考えられており、「〔シャクティを伴う〕シヴァ〔の形態〕は一と多のいずれでもない」(B. sūtra 2.4)。また、「シヴァはシャクティを生み出し、シャクティはシヴァを生み出す」(S 2.77)。かくして、「生じる一切の形態はシヴァとシャクティ」(S 2.76. Cf. also S 2.75) の姿に他ならない。これらの表現はシヴァとシャクティの不分離を強調しているが、両者に性格の違いがあることを否定するものではない。シャクティの特質は何よりも、本来形態を持たないシヴァの形態となってシヴァを現出させ、個我にとって近付き得るものと為すところにある (S 1.41. Cf. S 1.46, 54)。

一方、シャクティとマーヤーの間にも密接な関係が認められる。人間が救済にあずかるには、予めマーヤーから世界が創出され、世界の中において人間が一定の宗教的努力を行うことが必要である。そのため、シャクティ (共働因 saṃkārikāraṇa) がシヴァ (動力因) の意を体してマーヤー (質料因) に働きかけ、マーヤーから 36 の tattva と 5 つの kalā を展開させ多元世界を実現する。シャクティとマーヤーはそれぞれ精神存在、物質存在として対立する関係にあるにも係らず、実際には世界展開の過程全体を通じて両者にはある種の同等性が認められる。このことは最初の 5 tattva が創出される〈浄の創造〉の段落において取り分け顕著

である。この段落では「不可思議のシヴァのシャクティは〔これらの tattva の質料因である bindu と〕密接につながっている」(S 1.57)⁸⁾。その結果、「慈悲心 (kāta) からマーヤー (=bindu) は〔人間の〕無知を取り除くために kalā 等を与える。」(S 2.84) と云われるように、jaḍaであるべきマーヤーがあたかも能作者シャクティであるかのような表現も見受けられる⁹⁾。

第三に、シャクティは個我とも密接な関係を持っている。世界の展開のためにシャクティがマーヤーに働きかけることを上に述べたが、この段階ですでにシャクティは個我への働きかけを開始している。というのも、世界の展開は個我がこの世で身体を用いグルと聖典の教示に従って善行を積み、過去の悪業を相殺する (iru-vinai-oppu) ことを可能とし、個我の救済を主たる目的としているからである。そして、その上で今度はシャクティが śakti-nipāta によってシヴァから直接個我におよび、個我の本有的な汚れである āṇava-mala を取り除き、彼をシヴァの足下に導いて救済を成就させる。

以上述べたところを念頭に置いて、シヴァ、マーヤー、個我の関係をを見ると、三者は次のような仕方で一体の関係にあることが分る。即ち、シヴァはシャクティの行使者、マーヤーはシャクティの道具、個我はシャクティの対象として、シャクティを通じてそれぞれが相補的な関係を保っている。ŚS が強調する最高存在とマーヤーと個我の不離の関係は、恐らくこのようなシャクティを通じての三者の密接な関係を意味しているものと思われる。

さて、このようなシャクティを通じての一体性は、アーガマ神学とそれに基づいて哲学諸派に多かれ少かれ共通して認められるものであり、これをもって ŚS の思想的特徴と見なすことは出来ない。ŚS の特徴はむしろ、シヴァの本質的特徴としてアルル (aru) 「恩寵」ないしは「恵み」を意味する) を強調し (cf. S 1.37, 47, 51; S 2.15, 51 *et passim*)、このアルルがシヴァとマーヤーと個我をひとつに結びつけるシャクティに他ならないと考える点にある。「ハラはアルルをシャクティとして有する。アルルなしには知識〔であるところの〕シヴァも存在しない」(S 5.9. Cf. ud.3 *ad* B 5.2)。「〔ハラは〕アルルなるシャクティにおいて姿を現わす。彼自身が現われることはない」(S 1.68)。シヴァの一切の行為を実現するシャクティがアルルに他ならないことから、シャクティはこの派において「アルル・シャクティ」(aru-śakti) と呼ばれている。

シャクティがアルルであるということを踏まえて、先に見たシャクティを通じての最高存在とマーヤーと個我の一体性を再び検討すると、シヴァはアルル(「恩

寵」)の行使者、マーヤーはアルル実現のための道具、個我はアルルの対象として、三者はアルルを通じて一体の関係にあると言える。ŚSはこのようにして、VAのように3つの *padārtha* の別異性と一体性を存在論的観点から説明するのではなく、そのような段階を超えて、恩寵による一元論によって三者の間に一体の関係を見る。VAとŚSに見られるこのような基本的立場の相違は、Rāmānuja がパーンチャラートラ本集の神学を離れてヴェーダーンタ学派の伝統の中で思索しようとしたのに対して、ŚS がアーガマ神学を比較的忠実に継承したことに拠るものと考えられるが、それはまた、bhakti-yoga を重視する中世のヒンドゥー教から神の恩寵と官能的な bhakti を強調する近世のヒンドゥー教思想への時代状況の変化をも反映していると見る事が出来よう¹⁰⁾。

- 1) 紙幅の関係上、引用と典拠は VA については省略し、比較的未開拓の分野である ŚS についてのみ行う。本稿に述べる ŚS の思想は、ŚS の根本論書とされる Meykaṇṭatēva の Civañānapōtam (以下 B と略) と、それに対する注釈のかたちで編纂されている ŚS の代表的論書 Aruṇanti の Civañānacittiyār, supakkam (以下 S と略) に基いている。
- 2) sūtra 2.4 に対する udāharaṇa の中で、Meykaṇṭatēva は物質存在をシヴァの所有物、個我を彼の召使いと述べている。
- 3) B. udāharaṇa 4 *ad* sūtra 2.1 *pirippu inṛi*; hetu *ad* sūtra 11.2 *aṇṇiyam inṛi*. Cf. also B. sūtra 2.4; S 6.9, 8.22, 11.11.
- 4) B. udāharaṇa 1 *ad* sūtra 2.1; S 2.3, 5.7. Cf. also S 1.48.
- 5) “Civañānacittiyār, parapakkam sts. 264-301”, *Indological Review* 『インド学報』3, pp.1-18. 京都・インド学報社。昭和56年。
- 6) ŚS は物質存在として mala, māyā, karma, māyeyamala, tirodhāna-śakti の五種を算えるが (S 2. 86-97)、本稿ではその中から特に māyā を取り上げて検討する。
- 7) B. sūtra 2. Also B. udāharaṇa 1 *ad* sūtra 2.1. Cf. also S 1.27, 70; 2.1, 3; 8.30.
- 8) また、シャクティはこの段階で創出されるマントラともほぼ同一視されている。Cf. S 1.58-59.
- 9) 更に、S 1.14, 17; 2.81 の māyā に関する表現にも注意。
- 10) 恩寵の思想の強調は南インドの宗教思潮と切り離しては考えられないが、同時にカシュミール・シヴァ派の再認識派に見られる思想などとの関連も今後研究されるべき課題と見られる。再認識派の bhakti 思想については L. Silburn, *La Bhakti; le Stavacintamani de Bhaṭṭanārāyaṇa*. Paris 1964 参照。

〈キーワード〉Hinduism, Tamil, Śaiva Siddhānta

(京都大学助教授, Ph. D.)